

## 二国間交流事業 共同研究報告書

平成21年 4月 14日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

共同研究代表者所属・部局 京都工芸繊維大学・大学院工芸科学研究科

(ふりがな)

にしだ まさつぐ

職・氏名 准教授・西田雅嗣

1. 事業名 日仏交流促進事業 (SAKURA プログラム) 共同研究 振興会対応機関 (仏外務省)

2. 研究課題名 フランスの建築概念による日本建築再考と日本の建築概念によるフランス建築再考

3. 全採用期間

平成 19年 4月 1日 ~ 平成 21年 3月 1日 ( 2年 0ヶ月)

4. 研究経費総額

(1) 本事業により交付された研究経費総額 2,000 千円

初年度経費 1,000 千円、 2年度経費 1,000 千円

(2) 本事業による経費以外の国内研究経費総額 \_\_\_\_\_ 千円

## 5. 研究組織

### (1) 日本側参加者

氏名 <small>(ふりがな)</small>	所属・職名	研究協力テーマ
榎並 悠介 <small>えなみ ゆうすけ</small>	京都工芸繊維大学工芸科学研究科・造形科学専攻、博士後期課程学生	19世紀フランスにおける文化財の保存修復と建築設計の関係に関する研究 歴史建築・歴史街区フィールド調査参加
SAITO, Mizuki <small>サイトウ ミズキ</small>	京都工芸繊維大学工芸科学研究科・機能科学専攻、博士後期課程学生	日本建築に見られる空間概念の二重性に関する研究 歴史建築・歴史街区フィールド調査参加
VIGREUX, Edouard <small>ヴィグルー エドワール</small>	京都工芸繊維大学工芸科学研究科・機能科学専攻、博士後期課程学生	篠原一男の建築に見られる伝統性の研究 歴史建築・歴史街区フィールド調査参加
岡北 一孝 <small>おかきた いっこう</small>	京都工芸繊維大学工芸科学研究科・造形科学専攻、博士後期課程学生	近世ヨーロッパにおける建築理論書における修復と再建・再生の概念に関する研究 歴史建築・歴史街区フィールド調査参加

### (2) 相手国側研究代表者

所属・職名・氏名 フランス国立科学研究センター・共同研究単位責任者・Philippe Ann Bonnin

### (3) 相手国参加者（代表者の氏名の前に○印を付すこと）

氏名	所属・職名（国名）	研究協力テーマ
○ Philippe Ann Bonnin	フランス国立科学研究センター・共同研究単位責任者	日仏の建築的空間における空間境界のあり方としての結界の諸相 歴史建築・歴史街区フィールド調査参加
CLUZEL, Jean-Sébastien	フランス国立科学研究センター建築・都市・社会研究所(UMR7136)共同研究員	日仏のモニュメントのあり方とその概念の比較研究 歴史建築・歴史街区フィールド調査参加
WIESER, Ursula	社会科学高等研究院・博士課程学生	日本建築の場における領域境界のあり方に関する研究 歴史建築・歴史街区フィールド調査参加

## 6. 研究概要（研究の目的・内容・成果等の概要を簡潔に記載してください。）

「フランスの建築概念による日本建築再考と日本の建築概念によるフランス建築再考」と題された本研究の目的は、日本とフランスという文化の違いを尊重しつつも、違いを超えて同等の立場で建築をお互いに語る事の出来るより高次の共通の建築概念の構築を目指すものである。西欧の概念である「建築」という文化現象は、日本にあっても、「建築」という語を使いこそすれ、その言葉の背後には建物に対する日本文化に固有の見かたも維持されており、「建築」は個々の文化で異なる国民国家的な文化現象である。しかし一方で、異なる文化との協調は、グローバリズムに顕著に見られる如く不可避的なものであり、マクロにはどんどん均一化する世界文化は、一方でミクロには増々その個別性を強め、今や各文化間の差異を認め理解し尊敬し、時には他者の視線を取り入れる事なしには、グローバル文化世界は成立しない。「建築」という文化現象における、こうしたグローバル化へのささやかな貢献が、本共同研究には究極の目的としてある。

フランスの建築は、その形の背後にフランス的な建築了解とフランス的概念を持っているのであり、日本のそれとは異なる。本研究では、先ずはフランス的であるとの、或は日本的であるとの自覚の下になされた自国の建築研究を扱う。また同時に、それぞれの相手方の国の建築についての研究を積極的に行う。こうした研究には、当然ながら、眼差し、視線、興味、方法において、例え相手方の建築を扱っていたとしても自国の建築観が様々な形で表出する。そして今度は、以上を踏まえた新たなる建築了解の次元として、自国の建築研究に相手方の建築観に由来する観点、方法を適用する。これが本共同研究の方法である。

具体的には、1) フランス、日本の参加者の間に極力多くの発表・意見交換の場を持ち、双方の協力を得て、既に個別の研究として進行中の各人の研究に本共同研究の目的に即した次元を加え論考を著す事、2) 参加者全員が参加して共通の建築・場所をフィールド調査し、それぞれの立場から考察を加え論考を著す事、3) 比較文化論、比較建築論の領域での日仏シンポジウムに積極的に関与し、研究発表を行う事、4) 日本文化に特有の建築現象を扱った、評価の固まっている一つの著作を選び、日本とフランスが協力して仏語訳を作り、これに日仏双方からの訳注、解説、論考を付してフランスで出版する事、が実施された。もちろんこれらすべてにわたって、日仏の人的コミュニケーションと将来的な研究にも資する研究者ネットワークの構築は常に意識され、とりわけ若手の参加者に対しては、参加者以外の双方の研究者との接触の機会がもたれた。

1) については、パリ、京都において都合6回の会合を持ち、参加者の研究発表と意見交換・議論が行われた。発表予定のものも含めて20編程度の、本共同研究に直接・間接に由来する論文が期間中に書かれ、さまざまな媒体を通して公表された他、共同研究グループの中のフランス人参加者一人が、1冊の日本建築に関する大部の著作をフランスで出版した。また日本側参加者の二人のフランス人が、日本建築に関する博士論文を京都工芸繊維大学に提出し博士号を取得した。2) に関しては、平成19年度には山陰地方の歴史建築とパリの歴史的街区の簡単なフィールド調査を日仏のメンバーで実施し、平成20年度には、京都とブルゴーニュとローヌ＝アルプ地方の中世修道院で日仏フィールド調査を行った。3) は、本共同研究の日仏代表者が共に日仏の研究者ネットワークであるJAPARCHIの主要メンバーである関係で、平成20年12月に京都で開催されたJAPARCHIのシンポジウムに企画段階から関与し、本共同研究とのコラボレーションを図った。シンポジウムのテーマ「仕掛と概念：時間と空間の日仏比較建築論」は本共同研究から生まれたものである。本共同研究の日仏の代表者二人が研究発表を行い、日本の伝統建築の見学も行った。4) については、伊藤ていじ著『結界の美』の仏語訳を、本共同研究の日仏の代表者二人が中心となって終了し、出版社との交渉が開始された。

JAPARCHIの京都シンポジウムへの関与に典型的に見られるように、本共同研究の全過程を通じて、我々は日仏の人的コミュニケーションに重きを置き、以上の活動以外にも、特に日本側は、フランスにおけるセミナーや講演、シンポジウムの以来の機会を積極的に捉えて、問題提起としての日本建築紹介の口頭発表をいくつか行った。